

不登校生徒にとってのキャンプ体験の意味についての研究

～過去のキャンプ参加者の語りより～

田中 建哉 (生涯スポーツ学科 野外スポーツコース)

指導教員 林 綾子

キーワード: 不登校生徒, キャンプ体験, 意味, 内容分析法

1. 序論

今日の教育問題の一つに、不登校問題がある。これら不登校児童生徒に対する支援の一つとして、キャンプ等の自然体験活動が行われてきた。堀出(2005)はキャンプ前後を比較すると、社会性や自己概念、登校状況などが総じて向上すると述べている。このように不登校生徒へのキャンプ前後での効果検証は行われてきたが、筆者は不登校児へのキャンプの影響を評価する上で、長期的なキャンプの意味を調査する必要があると考えた。よって、本研究では、過去にキャンプに参加した対象者にとってのキャンプ体験の意味を質的なアプローチを用いて、明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

過去に不登校であり、教育委員会主催の不登校生徒のためのHキャンプに中学、高校と継続して参加し、現在ワーカーとしてキャンプに参加している男性4名を対象とした。データ収集は、対象者に2016年10月に半構造化インタビューの手法で行い、不登校時代の基本的な情報、参加者時代の話、ワーカー時代の話という分類にて、キャンプ体験について語ってもらった。分析には要約的内容分析法を用いた。

3. 結果と考察

要約的内容分析の結果、225のコード、25のカテゴリ、8のコアカテゴリが得られた。結果を図1の概念図にまとめた。本研究の結果として、対象者は<不登校状態>にて、対人関係の困難や学校生活の困難を感じていたが、人とは関わりたいという気持ちはあり、その気持ちや保護者の後押しがキャンプ参加に繋がったようである。しかし、参加に対しての心境としては対象者全員が<不安を抱えた参加>であったようである。<キャンプ体験>では、班活動やプログラムを通し、キャンプが<人と関わる場>として大きな存在となり、そこで会話の楽しさや人と関わることの楽しさを感じ、「対人関係の克服」「社会性の向上」「自己表現力の向上」という成長に繋がったと理解できる。さらに、その成長には<ワーカーの存在>が大きく関わっており、対象者が参加者だった頃は、優しい、関わりやすい、自分の居やすい空間を作ってくれる、会話の流れができるなど感じていたと口にしており、人と関わるのが苦手な不登校生徒にとっては、キャンプ生活におけるワーカーのサポートは大きかったようである。参加者は継続してキャンプに参加することにより、

<キャンプへの思い>も年々深まっていき、自分の居場所と感じていたり、関わり続けたいと思っていたということがわかった。その<キャンプへの思い>が高校への進学や、高校卒業後にワーカーとなる決意にも大きな影響を与えたようである。対象者は現在、社会人や大学生となり、それぞれ自らの決めた道を歩んでいる。対人関係や学校生活の困難を抱えていた不登校時代に、キャンプで人と関わることの楽しさを再認識できたことや、自分の居場所を見つけられたという経験は、対象者にとって非常に大きな事であり、現在、<自分なりの社会生活>を送っている。以上のことから、不登校生徒にとっての<キャンプ体験>は、キャンプが人と関わる場や自分の居場所となり、その中で苦手であった対人関係に関するスキルの成長が得られ、現在の<自分なりの社会生活の展開>へと繋がったという意味のある体験だったのである。

4. まとめ

本研究では、対象者にとってのキャンプへの思いやワーカーの重要性などのキャンプ体験の意味を質的なアプローチを用いて明らかにした。キャンプ体験が現在、自分なりの社会生活が展開できている一つの要因にもなったことが示唆される。キャンプという場の意味や、継続的な参加による成長など、キャンプ前後のみの検証では得られない知見が得られた。今後も、様々なアプローチからキャンプ体験の意味についての理解を深めることが、より効果的なプログラムやスタッフ指導に役立つのではないかとと思われる。

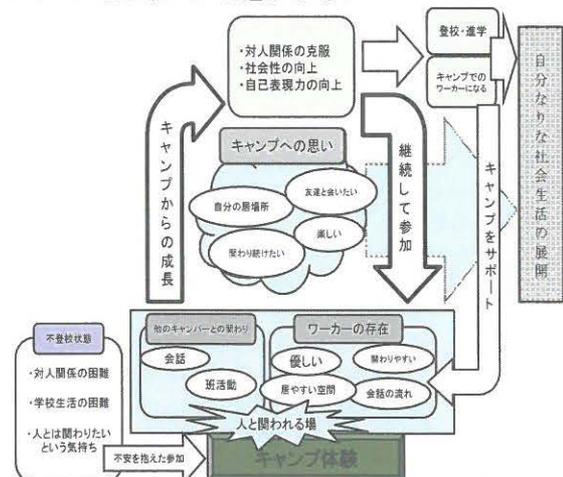


図1. 「不登校生徒にとってのキャンプ体験の意味」についての概念図

引用文献

堀出知里(2005). 通年型冒険キャンププログラムが不登校児の心理・社会的影響に与える影響. 筑波大学大学院体育科学研究科博士論文